

## シンガポール・マレーシア資料館探訪

足田 康行

## はじめに

一九九〇年秋、現在進行中のインターカレッジ研究プロジェクト「戦時期日本の対東南アジア経済支配の研究」のための資料調査の一環として、シンガポールとマレーシアを駆け足で訪問した。国外旅行は、生来の出不精と慢性的金欠病のため、今回でようやく二度目である。日本経済史専攻とはいえ、旧日本植民地や占領地への資本輸出や企業進出を研究しているものとしてはその研究姿勢に大いに問題があると、まずは反省しておこう。

それはともかく、初めての国でしかも五日間という僅かな期間で、どれだけ成果が挙げられるものか、不安は大きかった。国内でもそうだが、実証研究には資料の所在やアクセスの情報が不可欠である。それがかなりあれば、こ

のような不安も少なからず解消される。すでに情報をお持ちの方も多いと思うが、この僅かな経験を資料館紹介としてここにまとめ、皆さんの参考に提供する所以である。

まず、わたしたちのプロジェクトを簡単に紹介しておく。研究目的は、いまだ日本国内の経済統制策と経済構造を中心としている戦時日本経済研究の現状から脱却し、植民地・占領地を含めた「帝国」レベルの経済構造分析を進めるために、これまでとくに研究が手薄であった「南方」占領地に対する経済支配の政策と実態を明らかにすることである。メンバーは、疋田ほか、立教大学史学科現役院生の安達宏昭さん、同じく史学科OBの小田部雄次さん（徳川義親の一五年戦争の著者）、元摂南大学の倉沢愛子さん（『日本軍占領下のジャワ農村社会』の著者）、外交史料館の小池聖一さん（目下、日本海軍の南進政策を研究中）、駒沢大学の小林英夫さん（『大東亜共栄圏の形成と崩壊』の著

者)、元三井文庫研究員で現在電気通信大学の鈴木邦夫さん(目下『三井事業史』最後巻を執筆中)、大蔵省財政史室の柴田善雅さん(『昭和財政史』の編纂・執筆担当者だが、本来は日本の対東アジア通貨金融政策史の研究者)、現在三井文庫研究員の花井俊介さんの合計九人である。このうち研究機関に在籍している五人の名義で文部省科学研究費補助金を受け、活動している。

この調査には、当初は東南アジアに何度も調査に赴いている小林さんと、国外旅行は二・三回目で東南アジアはもちろん初めてという鈴木さんおよび足田の三人が参加する予定であった。ところが、小林さんは臨時教授会が出席日に開催されたため、彼が成田に現れたのは不参加の連絡と旅行社へのキャンセル手続きのためであった。かくて、日本語以外では会話できる自信をもたない二人の「冒険」旅行が始まった。しかし、小林さんはシンガポールとクアラルンプルの中国人の友人(王さんと李さん)に連絡をとってくださり、それぞれの方から会食のご招待と調査上の便宜をはかっていただけたことは、特記しておこう。

航空機と宿は、日本旅行社の「ベストツアー・シンガポール五日間」一人九六、〇〇〇円というパックを利用し、かなり安くあげた。というよりも、海外資料調査に使える研究資金援助を受けていないので、僅かな預金で賄える範

囲におさめるしかなかったのが実情。ただし、公的資料所蔵機関を訪問するので、日曜日や現地の休日に重ならない日程を選ぶほかなかったが、結果的にウィークデイ・パックとなって安くなった面もある。

だが、宿に指定されたホテル Melia at Scotts, 45 Scotts Road, Singapore 0922 は、一般的な旅行案内書には載っていないかった。同じ便に載っていたはずの日本旅行社のバックの参加者とおぼしき日本人の一人とも日が暮れたチャング空港で別れ、出迎えに現れた旅行者(日本旅行の現地代理業者)の小型ワンボックスカーにわたしたち二人だけが乗せられた時には、さすがに不安になった。しかし、やはり大手業者のバックだけあり、同ホテルは中堅どころの快適なもので日本のビジネスホテルなどより数段まさり、しかも地下鉄南北線ニュートン駅に近く、常設屋台が九〇軒も集まっているニュートン・サーカスにも近いという便利な場所にあった。日本人男性旅行者にはかならず来るという「女性紹介」の電話も、もちろん、かかってきたが、この「サービス」は丁重にお断りした。

さて、今回の調査は一九九〇年一〇月三〇日(火)から十一月三日(土)まで、実働期間はほんの三日間であった。一日目はシンガポールの“National Library”を、二日目はクアラルンプルの“National Archives of Malaysia”と

華社資料研究中心 (“The Malaysian Chinese Resource & Research Centre”) を、三田田はシンガポールの “National Archives of Singapore / Oral History Department” を、それぞれ訪問した。以下、順にその概要を(1)紹介しよう。

## 1 National Library of Singapore

所在地: Central Library: Stamford Road Singapore  
0617

: Tel 3009645/3009664 (Reference Information)

交通: 地下鉄 (MRT) の Dhoby Ghaut と City Hall  
の間、National Museum の隣

開館時間: 1F Adult and Young People's Section

Mon~Sat 9:00~20:00

Children's Section

Mon~Sat 9:00~17:30

: 3F Reference Service Division

Mon~Sat 9:00~20:00

その他、八個所の Branch Library がある。

この図書館は市立図書館的な機能が重視されているためか、小中学生・高校生もよく利用している。シンガポール

史苑 (第五二巻第一号)

では学校は午前の部と午後の部に別れているため、小中学生も午前中から出入りしていた。規模もやや大きめの公立図書館くらいである。

一階のエントランスホールの左側にクロックがあり、インド系と思われる女性を利用者の荷物を管理していた。一階の奥に進むと、左側に Children's Section が右側に Adult and Young People's Section がある。我々は当然右側の部屋に入った。開架式書架の戦時関係書籍(通史的なものが多い)をみたのち、レファレンスカウンターで日本軍政期の資料を探していると伝えたところ、三階のレファレンスで尋ねよとのことであった。再びエントランスホールへ出て、クロックの隣にある階段を上ると、二階にはオフィスがあり、三階には、一階の Adult and Young People's Section よりも広い Reading Room があり、Business & Technology 関係はわざわざ別室になっていた。また、この Reading Room とは階段をはちんで向き合う位置に South East Asia 関係のオフィスがあったが、特別の許可を得た者以外は立ち入り禁止であった。

三階の Reading Room では検索システムとして “OCT-PAC” と称する資料検索データベースシステムの端末が四台、中国語文献検索カードボックスおよびマイクロフィルム検索カードボックスとが設置されていた。この “OCTP-

シンガポール・マレーシア資料館探訪 (足田)

“AC”を使って、“OCCUPATION”とか“MILITARY”などのキーワード検索を行なったところ、欧米語文献を中心とする多数の関係文献が登録されており、初見のものも少なくなかった。しかし、Southeast Asia 関係室にある一点の閲覧を申し込んだところ発見できず三日待てこのことば、断念した。また、マイクロフィルム目録で昭南新聞があることも確認した。

この図書館に隣接して“National Museum”もある。資料さがしに疲れたら、美術品を鑑賞するのもよいだろう。残念ながらわたしたちの訪問した時は“Museum”は改装中であって、市民の書画展示会と陶芸の展示即売会しか催されていなかった。また、図書館の前にはバス停と小さな屋台式食堂もある。図書館の出入りのチェックはあまり厳しくないの、飲食はこの屋台が便利である。ただし、屋台のコーヒーはほとんどが「ネスカフェ」で、一杯飲むはいやになる。なお、管理国家シンガポールでは喫煙もままならないが、こうした屋台のなかでは自由に煙を楽しめる。

二 National Archives of Malaysia / Arkib Negara Malaysia

所在地 : Jalan Duta Kuala Lumpur 50568, Tel 2543244/

2543267

(クアラルンプール中央駅から直線で二四余)

交通 : Mini Bus No. 43: Bukit Bintang 発 Jalan

Duta 経由 Taman Maluri : 50 cents

Sri Jaya Bus No. 19 : Klang Bus Station 発

Jalan Duta タクシーは Jalan Duta でもかなり

流れている。

開館時間 : 月曜・水曜・金曜 〓 九 : 〇〇 ~ 一六 : 〇〇

火曜・木曜 〓 九 : 〇〇 ~ 一八 : 〇〇

土曜 〓 九 : 〇〇 ~ 一二 : 〇〇

この他、全国に一七～一八の Branch がある。その代表的なものには以下の通り。

- ① Malacca Branch (Johore Bahru) 1972
- ② Sarawak Branch (Kuching) 1976
- ③ Sabah Branch (Kota Kinabalu) 1977
- ④ Trengganu-Pahang Branch 1978
- ⑤ Kedah-Perlis Branch 1979
- ⑥ Pulau-Pinang Branch 1986
- ⑦ Kelantan Branch 1987

(西暦年は設立年)

スパン空港からタクシーで直接乗り付けた。空港では白

タクシーの客引きにあったが、小林さんのアドバイスに従い、正式のタクシー乗り場の料金所で行き先をつけ料金を払い、客待中のタクシーに乗った。タクシーでは支払証をわたすとともに改めて行き先を運転手に告げなければならぬ。料金はM\$一七・六〇、約八〇〇円であった。

都市国家シンガポールのそれとは桁違いに大きな National Archives of Malaysia は、主要官庁が森の中に点在する官庁街? の一角にある。門を入った所にある守衛所でパスポートを手渡して入館証を受け取り、低い丘の上にある同館への階段を上って二階の受付に入る。日本からの出発直前ではあったが同館の Mandin Hussin 氏宛に訪問と用件を連絡しておいたので「ハッサン」氏に会いたいと伝えた。ところが手紙のコピーをホテルに置き忘れてしまったので、別人の「ハッサン」氏のオフィスに案内されてしまった。彼は用件を確認したうえ、自分の名前をどこで知ったのかと尋ねたので、『CAP』掲載の各国公文書館ガイド(資料保存関係一覽)のコピーを示したところ、ようやく Mandin 氏への連絡がとれた。東京からの手紙も到着していることが確認され、受付事務官の Pabhakaran 氏に案内されて入館手続きをとり利用証が発行された。その際の同氏の説明によれば、同館の文書資料の利用には Application to conduct research in Malaysia を、訪

問前に Socio-Economic Research Unit, Prime Minister's Department に提出し許可を得ておかなければならず、許可の場合は News Paper と Book の利用に限定されることのであった。Application Form は所屬機関・政府機関との関係、研究計画の概要、マレーシアの研究機関との関係など、さらに夫人同伴の場合はその氏名職業までも記載する詳細なもので、一件について色の違う四枚のB四ペーパー(様式同一)にそれぞれパスポートサイズの写真を添付しなければならない。この申請書の届け先は以下のとおり。

Director General/Unit Penyelidikan Sosioekonomi,  
Jabatan Perdana Menteri, Blok, Pusatbandar Damansara,  
Damansara, Kuala Lumpur (TEL: 2545155)

である。審査手続きは長ければ六カ月かかるこのことで、来年再訪する予定ならば帰国後直ちに手続きをとるようアドバイスを受けた。

カバン類を受付カウンターの奥にある木製ロッカーに入れ、そのキー番号と自分の名前とをロッカーの上にある用紙に記入したのち、受付の左手奥にある鉄製防火扉から Research Hall に入った。

Research Hall は、三〇テーブル二〇席の広々とした天井の高い部屋であり、冷房が寒いくらいにきいていた。

中には六～七人の大学院生らしき人々が熱心に文書を読んでいたが、少々の会話は部屋の構造のせいもあって気にならず、また注意もされない。各デスクの上方は吹き抜けとなっており、回廊式の上層には Information Desk の後方の螺旋階段で上れる。そこには、王族やサルタンたちの榮譽を示す文物が展示され、また参考文献も若干おかれていた。この他 Map-Reading Room と Microfilm-Viewing Room もあるそうだが、今回は利用しなかった。コピーサービスは、タイプ・マイクロフィルム・同プリント・Xerography・写真などがあり、ほかに Jawi 文字からローマ字への翻訳サービスもあり、これらはもちろん有料。食堂は一階にあるが、カフェテリア式の小さなマレー料理の店で、さめたような魚料理の上には蠅が飛び回っていた。いかに空腹でも食する気にならないが、近くにはレストランはありそうになく、やむなくジャムパンとコークで済ませた。長時間の利用には弁当持参が必要であろう。

さて肝心の所蔵資料だが、Prabhakaran 氏の説明では、日本軍政期のものは「日本軍が破壊していったのではほとんどない」とのことであった。しかし、同氏は、Tochika・Kanbo Office・Somuka・Syuzetika・Zaimuka・Tihoka などのファイル名があるリストをみせてくれた。日本軍政事務書類と推定される資料が所蔵されているのは確実である。

だが、一般利用者に公開されている資料リスト *sena Raipenermaan* (accession list) には、日本の軍政期をカバーする資料名はあまりのっていない。そのなかで *British Military Administration* (1943-47) は、イギリス側のものであるが、イギリスが接収した資産に関する報告、捕虜文書の翻訳類もかなり含まれているようである。また新聞資料には、昭南新聞・ペナン日報など日本側発行のものも含まれている。

“ACCESSIONS LIST 1957-1967” は購入してきたが、これによれば、所蔵資料はおおむね一九世紀後半のものが大部分であり新しいものほど多くなっている。ただし、重要な条約や地図の類には一七世紀のものも見いだせる。この“LIST”には続巻が出ているので業者を通じて全巻発注したが、経済学部に出入りしている輸入代理業者はもっぱら欧米に顔をむけているようで、未だに連絡がない。

三 華社資料研究中心(The Malaysian Chinese Resource & Research Centre)

所在地 : Dewan Perhimpunan China Selangor(Selangor Chinese Assembly Hall), No. 1, Jalan Maharajalela (Birch), 50150 Kuala Lumpur.  
Tel: 2300887

交通：クアラルンプル中央駅から東へ三〇〇mほど、

チャイナタウンの南四〇〇m

中華大会堂の二階

開館時間：Mon~Sat : 9:00~17:00

National Archives of Malaysia を早めに切り上げ、小林さんから紹介された李さんに会うためチャイナタウンにタクシーで向かった。李さんは、法政大学で経済学を学ばれ、現在貿易会社を経営するかたわら、日本語学校も開いており、さらに日本へ留学生送りだすボランティア活動もされている。最近、日本留学は為替・物価の大幅な格差のために費用がかさみ、非常にむずかしくなっていると嘆いておられた。李さんは「華社資料研究中心」の基金抛出者の一人であり、李さんの案内で「中心」に歩いていった。

ここは全国華團文化工作委員會の下にあり、一九八五年元旦設立。名称からもわかるように、資料収集と研究が業務である。研究面では、政治・経済・社会・文化・教育・歴史・科学技術・文芸・宗教・哲学・中国医薬・翻訳などの領域を設定し、プロジェクト方式で援助をおこなっているが、重点はマレーシア政府に対する政策要求の立案にあるようだ。また、各地に Branch を設立する希望を持っており、地方資料の収集計画もある。蔵書は、中国語文献が

五、〇〇〇冊くらいあり、欧文・日本語文献も収集しているが、この機関の歴史が浅いためか、けっして多くはない特徴としては、日本軍政下の華僑迫害問題などの新聞特集記事などの切り抜きがある。経済史関係は、まだ文献収集や研究の射程に入りきっていないようで、ほとんどない。しかし、閲覧者記録をみるとすでに日本人研究者の訪問がかなりあることがわかった。

四 Oral History Department/National Archives of Singapore

所在地：Hill Street, Singapore

交通：地下鉄(MRT)の City Hall の南西約五〇〇m

Funan Centre (福南中心)のはす向う

開館時間：Mon~Fri: 9:00~17:00

Sat : 9:00~13:00

シンガポールに公文書館があるとは知られなかったもので、この調査は計画外だったが、二日間の調査で同所の刊行物“SYONAN: SINGAPORE UNDER THE JAPANESE”を見つけ、シンガポール日本旅行(現地法人)の堀内営業部長に場所を調べてもらい、訪問した。堀内さんは

本学経済学部OBであり、二日早く連絡をもらえば当地立教会の六大学野球優勝祝賀パーティーに招待できたのに、と残念がられていた。

“Oral History Department/National Archives of Singapore”は、写真・図面・聞き取り調査資料を中心とする文書館である。Hill Street をはさんで福南センターの斜め向かいにある灰色の古びルの一・二・四階にあるバス停前の小さな入口の上に、“National Archives/Oral History Department”と真鍮板に黒字で掛かれた看板があった。入口正面に Exhibition Hall と掛かれた部屋があったが、“Closed”となっており左側に事務室、右側に階段がある。階段を上って二階にいくと、正面に Research Room がある。

中に入ると、左に Officer 用のデスクが二つあったが誰も居らず、右側にカードボックスが並び、その奥の仕切られた部屋からインド系と思われる女性司書が出てきて用件を尋ねた。用件を述べるとこの部屋の主任と思われる中国系女性司書が交替して、簡単に利用法を説明してくれた。Malaysia の Archives のような面倒な手続きはいらないように、資料請求と複写依頼の場合に書類を作るだけである。Research Room は、二〇人分ほどのデスクがあり、奥には Microfilm Reader Printer が数台、またオーディオテ

ープ再生機も数台あった。利用者は二〜三人であり閑散としていた。

所蔵資料は、カードで調べるかぎり、AV資料が中心で文書資料はほとんどなかった。日本軍政期資料としては、“NA 157, Tourist Promotion Board, Japan Occupation Documents, 1939-1945, 47 items, 1 reel, Mf u 30.9.75”が見つかっただけである。証言資料は、英語の場合には、タイプされていることもある。

この資料収集活動の成果として、日本軍政期の写真記録集と証言(回想録)集が発行されている。後者は、“SY-ONAN/Singapore under the Japanese/A Catalogue of Oral History Interviews”と題われ、録音テープの reel No. と証言者や経歴や証言概要が紹介されている。証言者の中には軍政に協力させられた者もあり、文書資料の欠落を多少とも補える可能性がある。同書のビブリオには、“British Military Administration” 関係文書が記されており、通常は閲覧に供されていない BMA 文書も所蔵されていると推定される。この文献は一階の事務室の一角で販売している。

## おわりに

以上、ながながと短い調査旅行を報告してきたが、最後



に旅行記らしく町の印象を述べておこう。

シンガポールでは大規模な都市改造が行われており、チャイナタウンやインド人街の古い町並みが東京の地上げのようにあちこちで整理し破壊されていた。キャセイシアター近くのインド人カレー屋でカレーをみやげに買って帰るようにとの小林さんの注文があり、夕食に本場のカレーを食べようと付近を一時間半ほど探したが、更地となった旧市街と歯の抜けたような商店街しか見つからなかった。これにかわって、都心部とチャンギ空港の間の広い道路の両側には、比較的高層の集合住宅が建設されていた。都心の旧市街から移住させられているのかもしれないと思った。建設ラッシュにもかかわらず、都市の新しい道路には、歩道部分までヒビがはいっており、ここでも手抜き工事がはびこっているのかと、疑った。建設現場の業者名表示には、日系企業名がかなり見いだせた。

成田への航空機の中で隣り合わせたシンガポールの技師さんが、タバコの火を借りたことから話をはじめ、シンガポールの印象を尋ねてきた。私は前年訪れたアメリカ合衆国と対比して、活気があり清潔な町だがタバコが自由に吸えないのが残念だ、といったところ、彼が吐き捨てるように“Too much controlled”と言ったことが鮮明に思い出される。

クアラランプルは森の町という印象で、空から眺めても森の中に団地の建設が進んでいるのがよくわかる。他方、ココヤシなどのプランテーションも大きく、錫鉱山とおぼしき緑のはがされた場所も目についた。チャイナタウンは、古い町並みが残っており、屋台も夕方から目抜き通りに現れてくる。常設となっているシンガポールとはかなり違う。李さんのお宅にも招待されたが、その住宅環境と言い、通勤道路の周辺と言い、日本のややさびれた地方都市によく似ていた。

なお、一二月頃から当地は雨季に入り、毎日激しいスコールがある。当地の人々は一〜二時間ほど待てばよいとしているのか、あるいはあまり役にたたないとしているのか、傘を持つ人は多くはない。暑さがまんでくれば、レインコートの方がよいかもれない。また、図書館・公文書館は冷房がきき過ぎているので、長時間の利用には上着かカーディガンが必要。